

## 勿凝学問 108

スティグリッツがそんなこと言うわけがない  
史上最大の余計なお世話？

2007年10月19日  
慶應義塾大学 商学部  
教授 権丈善一

秋も深まり、入ゼミ説明の季節になってきた。オムニバス形式の講義で、日吉に年に2回ほど出かけて、「社会保障」の話をしている。今日10月19日金曜日も講義を終えると、2年生の学生がやってきて、「先生のゼミに入るには、どんなことを準備しておけばいいですか」と問われたから、「経済学説史でもやっといてくれ。あと数学とか統計学ね。そこらへんにある社会保障の本とかは間違えても読まないように」と回答——この回答、正直な気持ちである。

また、入ゼミのテストは、これまでスティグリッツ『入門経済学』から出していた。だからゼミ志望の2年生は、『入門経済学』をちょいとまじめに読んでいる。この本について、学生のなかには、「スティグリッツさんは、日本語が苦手なんですね」とおしゃれな感想を言う者もいる——僕としてはノーコメント。ところが、おとつとつということが、スティグリッツ『入門経済学 第3版』に書かれているので、今日も筆をとったわけである。スティグリッツ『入門経済学』を入ゼミ志望の学生に薦めていた手前、随分と前から、書かなければなあと思っていた話である。

2005年4月にスティグリッツ『入門経済学 第3版』が出た。手に入れてながめていると、ムムムッ！？ 284頁に次の文を見つける。

日本は長寿世界一で、出生率もかなり低く、年金問題は世界でもっとも深刻である。しかし少子高齢化は予測可能なことであり、世代間分配の改善と民営化への計画的対応によって、年金制度の維持可能性を高めることができる。

あれっ、僕が知っているスティグリッツさんの他にも、スティグリッツさんっていたっけ？

民営化への計画的対応によって、年金制度の維持可能性を高めることができる！？

スティグリッツがそんなこと言うわけがない。思わず、今僕が読んでいる文章を確認してみると、「CLOSE-UP 日本語版 日本の公的年金の維持可能性」というコラムだった。

スティグリッツが日本語版にコラムを寄せたのか！？でも、内容があまりにも・・・と思  
って、「訳者はしがき」をチェックすると、次の文章があったので、ホッと、胸を撫で下ろ  
す。

本書においては、原著のコラムのほかに、訳者たちによる「日本語版コ  
ラム」や「補論」が加えられているが、それらは日本経済にかんするも  
のだけではなく、教科書の内容を理解しやすくするためのものを用意し  
た。

翻訳者の方々、ご苦労様です、はい。親の心、子知らずじゃないけど、ただの、「ステイ  
グリッツの心、翻訳者知らず」というわけですね（笑）。

これもまあ、コメントらしきことは控えておきましょう。

ただし、僕にスティグリッツ『入門経済学 第3版』を薦められた日吉の学生さんは、  
次のスティグリッツの文章も必ず読んでおいてください。

奇妙だったのは、クリントン政権の国外向けの弁解と、国内でくりひ  
ろげていた戦いととの対照である。国内では、われわれは公共の社会保障  
〔アメリカでは年金を意味する〕を民営化することに反対し、公共によ  
る社会保障は処理コストが低く、国民の収入を保障し、高齢者の貧困を  
ほぼゼロにしていると絶賛していた。しかし国外では、われわれは民営  
化を推奨した。

スティグリッツ(2003), p.45. [Stiglitz (2003),p.22]

(公的年金の) 完全な民営化はもちろん、部分的な民営化でさえ、進め  
るにたる合理的な理由はまったくないのである。しかし、反対する理由  
ならいくらかもある。

スティグリッツ(2003), p.249. [Stiglitz (2003),p.198]

大統領経済諮問委員会の委員長から世界銀行のチーフ・エコノミスト  
へと仕事が変わったとき、私が最もとまどったのはIMFとアメリカ財  
務省が外国で推奨している見解が、たいてい私たちが国内で必死に主張  
しているのと正反対のものだったことである。私たちは国内で、公的年  
金の民営化に反対して戦った。しかし外国では、それを熱心に勧めてい  
た。

スティグリッツ(2003), p.283. [Stiglitz (2003),p.283]

J.E.スティグリッツ(2003)『人間が幸福になる経済とは何か——世界が

90年代の失敗から学んだこと』

J.E.Stiglitz (2003), *The Roaring Nineties: A New History Of The World's Most Prosperous Decade.*

なんかねえ、瞬間的に、おいおいそれは違うだろうがと言いたくなることってあるもんです。

2週間ほど前、学生と河口湖に遊びに行っていたとき、夜の宴会時、ある学生が、いま『竜馬がゆく』を読んでいますというから、「竜馬が土佐の洋学者のところに行って、先生の訳を聞いていて、“訳が間違うちよる”と言うところがあったと思うんだけど、それがどこか見つけておいてくれ」と彼女に頼んでいた。

その返事が

Subject: 「竜馬がゆく」お探しの箇所

- > 権丈先生
- > 昨日はゼミのテニス部合宿お疲れ様でした。
- > 飲み会でおっしゃっていた、「竜馬がゆく」の、
- > 竜馬が蘭学塾の講師に間違いを指摘する場面ですが、
- > 第2巻の、183ページあたりではないかと思います。

この蘭学塾のふまじめな聴講生だったころ、竜馬にはこんなはなしがある。ある日、師匠のねずみ（河田小竜）は、オランダの政体論についての一文を、逐条翻訳した。訳が終わるころ、いつもながら居眠ったような姿で膝小僧を抱いている竜馬が、急に顔をあげ、

「いまの訳、間違うちよります」

といった。

塾生は、みなおどろいた。

蘭語の一語もおぼえようとしないこの剣術使いが、いきなり先生の誤訳を指摘したのである。師匠のねずみはみるみる真っ赤になって、

「どこが、間違うちよる」

ときりかえした。竜馬は気の毒そうな顔をして、

「間違うちよるから、間違うちよる。どこが間違うちよるかわからんが、ただずっと間違うちよる」

「お前のいうことはわからん」

「わからんことはない」

「師匠を愚弄するか」

「なかなか」

竜馬は、困ったなという顔つきで、

「もう一度、よく原文を読んでください」

とたのんだ。が、何度もこのねずみの塾で、ねずみの粗末な蘭文和訳をきいているうちに、西洋の議会制度というものがわかったのだ。竜馬には「資治通鑑」のときもそうであったように、ものの大意を大づかみにつかみ、その本質をさぐりあてる才能がある。いまのねずみの翻訳では、竜馬がカンでさとった民主政体の本義からはずれているのである。その点から、誤訳を指摘したわけだ。

「まあ、怒らんで、もう一ぺん、その横文字をみてください」

「ふむ」

ねずみは、怒りに手の指をふるわせながら自分の翻訳を検討した。ねずみの顔色がだんだん蒼ざめてきた。竜馬のいうとおり、あきらかな誤訳であった。ねずみは、ぐっと顔をあげた。

「諸君、あやまる、間違うちよった」



河田小竜塾跡

スティグリッツは「民営化への計画的対応によって、年金制度の維持可能性を高めることができる」なんて、絶対に言わないってことくらい、みんなわかっておこうな。まだなんの免疫もついていない初学者が読む教科書だから、影響力大きいよ、まったく（涙）。翻訳者がわざわざこんなコラムを付け加えるなんて、史上最大の余計なお世話？・・・おっと、ノーコメントのつもりだったのにコメントしてしまった。



2007年10月20日～12月2日まで設置されている櫓からの景色